

小針進編・聞き手 小針進・ 佐道昭広・室岡鉄夫・高安雄一 『崔書勉と日韓の政官財学人脈— 韓国知日派知識人のオーラルヒストリー』

同時代社, 2022年

本書は、戦後日韓関係において「非公式チャンネル」ではあるが、重要な存在感を示した崔書勉という人物に注目し、約70時間にも及ぶヒアリングを行い、それをオーラルヒストリーとして記録したものである。全十七章から構成され、二段組み本文全581頁の膨大な量に昇る。日本統治下の学生時代から2020年までの生涯にわたる、崔書勉の個人史であると共に、彼と日韓の有力者とのネットワークの歴史を通して日韓関係の一断面に迫るものである。まずは、多大な労苦を惜しまず、後学のために、これほど貴重な史料を残してくれた小針進を初めとする4人の研究者に、僭越ながら朝鮮半島研究者を代表する立場から、最大限の賛辞と謝辞を贈りたい。なお、書評という文章の性格上、氏名については敬称が必要だと思われる場合を除いて、敬称を一切省略する。

崔書勉は、1928年、日本統治下の朝鮮江原道原州に生まれ、代表的な独立運動家である金九に師事する形で政治と関わりを持ったが、李承晩政権下の57年日本に亡命し、その後69年に東京韓国研究院を設立、そこを拠点として金玉均や安重根などに関する学術研究活動を行いながらも、日韓の政財界関係者との濃密なネットワークを構築し、それを基盤として日韓の架橋的な役割を果たした。その後、晩年の88年、民主化された韓国に完全帰国して国際韓国研究院を設立したが、2020年に他界した。

本書の編著者である小針進は、オーラルヒストリーを通して日韓関係を解明する科研費プロジェクトを長年推進してきた。崔書勉の他にも、

権五琦・前『東亜日報』主筆（故人）や崔相龍・前駐日韓国大使・高麗大学名誉教授などのオーラルヒストリーを世に出してきた。崔書勉には橋本明の著作⁽¹⁾などもあり、研究者の間では「知る人ぞ知る」人物であるが、率直に言って世間的な知名度がそれほど高いわけではない。

評者は、二度ほど崔書勉氏にお目にかかったことがある。最初は、評者が1980年代に入って本格的に朝鮮半島研究を志そうと考えた時に、資料を探索するために東京韓国研究院を訪問した時である。二度目は、2016年、韓国国立外交院外交史研究センター主催の研究会で、評者が1970年代初頭の韓国外交に関する研究発表をしたのだが、その時、彼も出席していて貴重なコメントをいただいたことがある。

崔書勉は所謂「黒幕」と呼ばれるような、権力を持つ「ガラガラした」人物ではなかった。何を生業としているかということ、やはり研究者という紹介が適切だろう。但し、私と同じ制度的なアカデミズムの同業者だというには、余りにも生々しい。日韓の政財界の間で、しかも、韓国では朴正熙（1917～79年：1961～3年国家再建最高会議議長、1963～79年大統領）、金大中（1924～2009年：1998～2023年大統領）、日本では福田赳夫（1905～95年：1952～90年衆議院議員、1976～78年首相）という核心的な人物たちとの人脈を構築することで、日韓関係を形成するのに重要な役割を果たしたからだ。

そこですぐに思い浮かぶ疑問は、一介の研究者がなぜ、これほど重要な人脈を構築することがで

きたのかという点である。通常、日韓の政財界の間には「欲得」、つまり利益配分をめぐる関係が支配する。そうした中、崔書勉は「欲得」で動いていたわけでは決してなかった。韓国政治において「宿敵」とも言える、朴正熙と金大中の双方と太いパイプを持っているという非常に稀有なことは、彼の行動の動機づけが狭義の「利益」でなかったことを示す。だからこそ、日韓の政治指導者との間に信頼関係を構築することができたのではないか。

では、何が彼を突き動かしたのか。本書に明示されているわけではないが、その言動などから、日韓の間に身を置くという「数奇な宿命」の下で、この関係にどのように立ち向かうのかを、自らの使命としたからではないか。日韓関係を自分の人生そのものと重ね合わせ、自らの人生の課題としたからではなかったか。

本稿では、評者が興味深いと考えた3つのエピソードを取りあげてみたい。第一に、やはり関心を引く部分は、維新体制の成立後、金大中拉致事件が起こる1973年8月よりも前、金大中が事実上日本に亡命するようになっていた状況の下で、金大中を帰国させて「副大統領」にするという、福田赳夫周辺から出た案を、朴正熙大統領に伝える役割を崔書勉が担い、実際にそれを金大中、朴正熙に打診したということである（本書 310-315頁）。それを「韓国版『国共合作』」と表現した福田の発想も興味深いのだが、この点は、日本における福田赳夫研究で言及されることはほとんどなく、崔書勉の証言だけに依拠せざるを得ない。この構想の現実可能性を関係者がどの程度真摯に考えていたのか、当時の韓国政治状況を考慮に入れると懐疑的にならざるを得ないのだが、韓国政治に日本の政治家がここまで「介入」できるような当時の日韓関係の雰囲気や、象徴的に示したエピソードだと思う。1970年代の日韓関係を形容する場合、批判的な言辞で「癒着」という言葉が頻繁に使われたのだが、そうした関係の一断面を示すエピソードではなかったか。

第二に、日韓の間に身を置いた立場ならでは、米国や中国を間に挟んだ日韓関係に関する興味深い言及である。これは2015年7月、ちょうど岸

信介首相の孫に当たる安倍晋三政権と朴正熙大統領の長女である朴槿恵政権との間で、慰安婦問題に起因して険悪な日韓関係であった時期の言葉である。少し長くなってしまいが、大変興味深い一節なので紹介しておきたい。

「韓国-日本-アメリカの三角関係は非常に微妙でして、基本的には韓国にはアメリカ人が何万人も死んでくれている（評者注：朝鮮戦争でのこと）。アメリカは多くの日本人に殺された（評者注：太平洋戦争でのこと）。そういう相関関係をまずひとつ置いて、カトリックの場合は韓国人は十人に一人になったが、プロテスタントを加えると七人に一人がクリスチャニティーです。アメリカも基本精神はクリスチャニティー。ですから、アメリカと韓国とは一体的な面が最終的にあります。現実には、韓国はアメリカの負担になってしまう。早く切り捨てたいのが韓国であるのだが、日本には力を借りたい。アメリカは日本なしに世界の警察官にはなれない。こういうパターンがありますから、いつもこのパターンの中で韓国があり、日本があるわけです。だから、時期に応じて動くのであって、一緒に動くというのは非常に難しい。ただあったとすれば、冷戦時代に「共産主義は日本、アメリカおよび韓国の共通の敵である」というはっきりした敵があるときには一体感があるんだけど、今は韓国は中国と仲良くしないといけな地政学的な理由がある。それを日本は妬んで、「韓国は中国という憎らしきやつと一緒にするのか。じゃ我々はアメリカとくっついて、おまえと離れる」とか、いろいろ複雑な様相が出てくるので、その中で何時がこうだった、何時がこうだったというのは非常に表現しにくいところがあります。」（本書 511-512頁）

2022年5月に尹錫悦政権が成立して、米中関係に関する韓国外交のスタンスが変わったわけだが、それを留保しつつも、米国や米中関係をめぐる日韓のスタンスの違いをこれほどの確に表現できるのは、後半生を日韓の間に身を置いてきた崔書勉だからではないか。冷戦時代には、冷戦体制に「便乗」した韓国と冷戦に関わりながらも一定の距離を置いた日本があった。しかし、今日の「米中新冷戦」時代には、むしろ、「インド太平洋」

構想を日本が主導して米国の関与を確保することに執着するのに対して、韓国では、それに与しようとはしなかった文在寅^{ムンジェイン}進歩政権と、遅ればせながらそこに参加しようとする尹錫悦保守政権との間で好対照を示す。こうした韓国外交や日韓関係の複雑さを、崔書勉は非常に的確に見抜いていた。

第三に、1970年代、朴正熙政権が取り組み始め、80年代に入ってから「北方外交」として結実した、中ソなどとの対共産圏外交に関して、崔書勉が一役買ったという部分である。朴正熙大統領から「半分日本人」と言われたのに若干憤慨したわけだが、大統領から直々に、そうした立場を利用して韓国旅券の所持者でありながら、韓国人が難しい中ソへの訪問を実現するように頼まれ、それを実現し、その結果を大統領に報告したという。それが韓国外交にどの程度貢献したのかはわからないが、日韓の間に身を置きながら、韓国の対共産圏外交に貢献を果たしたのは非常に興味深い（本書 479-480頁）。当時の日本は、中ソなど共産圏と韓国との架橋的な役割を一定程度果たしていたとも考えられるからである。

崔書勉が活躍した1960年代・70年代、日本は先進民主主義国だが政権交代の可能性が閉ざされた自民党一党優位体制が持続したのに対して、韓国は開発独裁体制であり、「日韓癒着」と揶揄されたように、一握りの政治指導者、財界人によって日韓関係が担われていた。だからこそ、崔書勉のような人物が存在感を持てたとも言える。しかし、今や、日韓は先進資本主義・自由民主主義という体制価値観を共有することで、それ以前の非対称・相互補完的な関係から対称・相互競争的な関係へと変容した⁽²⁾。外交も一握りの政治指導者が左右できなくなった。何よりも日韓共に国内世論を無視して外交を行うことはできないからで

ある。

しかし、日韓関係において「人間関係」が重要であることはどんなに強調してもし過ぎることはない。最近『安倍晋三回顧録』⁽³⁾『文在寅回顧録』⁽⁴⁾を読んで、なぜこの政権の組み合わせの日韓関係がこれほど険悪であったのかを今更ながら考えさせられた。お互いに相手に対するリスペクトがない状況、しかも「米国をめぐって自分たちの方が関係がいい」とお互いに思い込んでいた、そうした状況であった。そして、こうした信頼のない指導者同士の関係が、いかに日韓関係を傷つけてしまったのかがわかる。現在、日韓双方の政権ともに国内基盤の脆弱性を抱えているので制度化には限界があったが、岸田文雄政権と尹錫悦政権との日韓関係がなぜ劇的に改善されたのかを想起すると、首脳同士の人間関係を始めとして、1人1人の人間関係が、日韓の間ではいかに重要なのか、今改めて考えさせられる。

本書は、崔書勉という、日韓の間に身を置いてきた1人の人物を通して、日韓の人と人との関係がいかに重要なのかを改めて考えさせられる重要な契機となったことを強調しながら、本稿を締めくくりたい。

(木宮正史 東京大学大学院総合文化研究科)

- (1) 橋本明『韓国研究の魁：日韓関係史を生きた男』2017年、未知谷。
- (2) 木宮正史『日韓関係史』岩波書店、2021年。
- (3) 安倍晋三著・橋本五郎（聞き手）・尾山宏（聞き手・構成）・北村滋（監修）『安倍晋三回顧録』中央公論新社、2023年。
- (4) 문재인 지음, 최중건 대담, 『변방에서 중심으로 문재인 회고록: 외교안보 편』, 김영사, 2024년. (文在寅著 崔鍾建対談『辺境から中心に 文在寅回顧録：外交安保編』キムヨン社、2024年)。